単元の言語活動６

人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する

活動のねらい

本活動では、作品を脚本化し、実際に演じてみることで、登場人物の心情を生き生きと想像することを目的とする。脚本化という方法は、地の文では直接的に表現されていない登場人物の心情を、動作や台詞として顕在化させる。義仲、巴、兼平の心情のすれ違いの経緯が、作品とは異なる角度から、深く理解されるのではないだろうか。

「木曽の最期」の特徴の一つに、すれ違いを重ねる登場人物の悲哀に満ちた人間ドラマが生き生きと描写されている点が挙げられる。具体的には以下のような要素に、登場人物の気持ちのすれ違いが確認されよう。

(1)最期まで付き従おうとする巴に対して、義仲はその場を去るように命じる。

＝巴は義仲を慕って一緒にいたいと思っているのに対し、義仲は主君としての体裁を保つために弱みを見せたくないと考え、すれ違っている。

(2)義仲は「もう疲れた」と乳母子の兼平に甘えるが、兼平は義仲に自害を勧める。

＝義仲は先ほどの巴と同様に、最期まで兼平と一緒にいたいと願うが、兼平は武士として名誉の死を遂げてほしいと切に願う点で、すれ違っている。

こうした「木曽の最期」の特徴について、佐伯真一氏は次のようにまとめておられる。

自分の弱さをさらけ出し、兄弟のような兼平の気持ちも、どちらも人間らしい感情であり、また、愚かな人間のこだわりである。結局、兼平の奮戦の背後で、松原へ向かった義仲は、深谷はまって泥まみれになってもがくところを射られ、首を取られてしまう。自分の願いがかなわなかったことを知った兼平は直ちに自害する。そこに描かれているのは、巴と義仲、義仲と兼平の間で、二通りにすれ違った愛情の物語であるともいえよう。

『平家物語』は、ここで理想的な英雄の美しい最期を描いているのではない。愚かな人間たちのこだわりがすれ違ったあげくに、泥まみれの最期に至るさまを、その愚かさに限りない共感を込めて描いているのである。

（『人生をひもとく日本の古典・四　たたかう』岩波書店）

今回の活動では、本文を脚本化し、演劇化することで、登場人物の思いを明確な形で言語化し、登場人物のすれ違いをよりはっきりと生徒達に認識させることを目標とする。

タイトル・序文の解説

生徒達が本文を理解する際に、言語化された文章の意味を解釈するだけでなく、演劇などの様々な形態で再生産することが可能であることを学ぶ機会としたいという狙いを、タイトル・序文を通じて伝えたい。なお、今回の課題だけでなく、能「巴」などを紹介し、過去にも様々な形で翻案化されてきたことを伝えることもできよう。

「課題」の解説

課題　**「木曽の最期」を脚本化し、演じてみよう。**

「人物の心情を想像」するという点については、巴、義仲、兼平の明文化されていないそれぞれの思いを生徒達に想像し、理解してもらうことを目的としている。前述の通り、登場人物の気持ちはそれぞれすれ違うのであるが、本文ではそれが書かれていない。「脚本化」によって、台詞の形で登場人物がそれぞれの思いを吐露されるため、どのような点ですれ違いが生じているのかが明らかになるはずだ。

「活動」の解説

1　**担当するシーンと役割分担を決めよう。**

① **グループを作り、次のA～Cから一つずつ担当するシーンを決める。クラスの人数によっては一シーンを担当するグループが二つになってもよい。**

シーンA「義仲と巴の別れ」
シーンB「義仲を励ます兼平」
シーンC「義仲と兼平の最期」

② **義仲役・巴役・兼平役・ナレーション役・演出などの役割分担を決める。**

2　**「せりふ」と「ナレーション」を考え、脚本を作ろう。**

① **グループ全員で話し合い、登場人物の「せりふ」を考える。「木曽の最期」の会話文を参考にするが、登場人物のさまざまな心情を想像して、本文には書かれていない表現を補ってもよい。** 知技(1)オ・(2)ウ

② **場面の説明など、「せりふ」だけでは伝わりにくい要素を補足説明する「ナレーション」を考える。** 思判表B(1)イ

③ **「せりふ」と「ナレーション」を脚本にまとめ、読み合わせをする。不自然な「せりふ」や、伝わりにくい「ナレーション」の表現がないか確認する。** 知技(1)エ　思判表B(1)オ

3　**完成した脚本を基に演じてみよう。**　主態

①　グループごとに脚本を輪読して、発表する。「せりふ」の担当者は、登場人物の心情を想像し、感情を込めて読む。

②　ほかのグループの脚本のよかった点をあげる。

特に、活動の序盤では、教員がある程度方向性を示すことで、生徒の取り組みやすさが格段に上がるだろう。**1**では、「本文の会話文では直接表現されていない登場人物の心情」を、台詞や動作で表現するよう指示すると、方向性が定まると思われる。

生徒の様子を見ながら、取り組むべき課題を適宜具体的に説明することが重要になる。

評価規準

〔知識・技能〕⑴エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。
〔知識・技能〕⑴オ　我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。
〔知識・技能〕⑵ウ　古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴イ　「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴オ　「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。
〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで音読することを通して『平家物語』特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、今までの学習を生かして、「木曽の最期」を脚本化し、物語に描かれた人物の心情を深く読み取ろうとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑵オ

（小林　俊洋）